

ふちゅう東西南北 隣接市の“学びのスポット”巡り・小金井市編

府中市に「小金井街道」があり、これをたどれば小金井市に着くとは知っているも、実際のところ、何があるの?と考えると、あまり出てこない。今回の散策は小金井市。縦断しながら学びのポイントを探った。



《散策コースを企画して》 小金井市の散策にあたり、今回は「文学の道」コースはいかが?とのヒントをくれた人がいた。小金井市役所で「小金井てくてくMAP」をもらい調べてみたら、文学に限らず、多様な文化人ゆかりの場所が沢山ある事を知った。



早速各所の下見に行くと、同市は北部が南部の標高より高いと感じたので、メンバーの体力を考慮してなるべく南下する順路にした。玉川上水の名勝小金井櫻碑を起点に、浴恩館、三光院を巡り、武蔵小金井駅近くのしあわせ地蔵を拝顔後、はけの道から野川を渡り、最後は多磨霊園の小金井市エリアに至る行程となった。

秋の日没は早く、散策終了時には夕暮れとなったが、休憩を含んだ4時間弱で、小金井市の魅力を垣間見ることができた。(竹村 稔)

《浴恩館》 浴恩館は「次郎物語」の作者下村湖人ゆかりの場所である。教育者でもあった彼が、初代館長として若者たちの指導に当たりながら、この地をモデルに構想を練り、次郎の少年時代を描いたとのことだ。



次郎物語は長編のため、ひどい飛ばし読みをした私は、読まなかったのと変わらないのだが、第三部に書かれていた「白鳥蘆花に入る」の言葉は、なぜか中学時代から今に至るまで忘れられない。浴恩館は、現在、小金井市文化財センターとなっている。(中井博子)

《多磨霊園の市境》 多磨霊園内に府中市と小金井市の市境があり、調べてみると多磨霊園ができたのは大正12年。当時は多磨村と小金井村にまたがる雑木林に霊園を開いたと記述があった。

府中市が昭和29年、小金井市は昭和33年に市制施行とあるので、その村々の境が今の市境となるようだ。歩いてみても境目には何もない。ただ整然と墓碑が並ぶ。

私は、市境は道路上にあるものとばかり思っていたので、霊園というひとくくりの中に境が引かれていることが不思議だった。長い年月の中では色々な線が見えないところにあるのだな、とふと思った。(辻 麻美)

《改めて行ってみた》 東京西郊に日本最初の広大な規模を誇る公園墓地多磨霊園があります。府中市と小金井市の両方に跨る広さで、50万人の御霊が眠っています。政治・経済・文化等時代を創り世相を彩った方々も。

以前私は疑問を感じていました。何故、多くの著名人がこの霊園を最後の眠りの場所として選んだのか?その答えになったひとりに、稀代の名将と言われた東郷平八郎の存在があります。当時の日本の社会背景の中で求められた人格者だったのでしょか。(柴田洋子)

《小金井の栗》 大國魂神社で秋季祭「くり祭」が行われるので、府中は栗が特産で歴史も古いのかと思っていたが、小金井市にも栗にまつわる話があり少し歴史を調べてみた。元文のころ川崎平右衛門が、



武蔵野の台地が栗の発育に適していた事、保存食として重要視され更に上質の栗が採れる事から徳川家に献納するようになった。府中市にはくり祭が伝承され、小金井市は地名に栗山公園(写真)やマロンホールなど、栗とつく名が残されている。

府中だけではなく武蔵野台地が栗の産地だったことがわかった。(井口文江)

《三光院》 ここは臨済宗の尼寺で、創建90年。

正面の庭には数本の赤松がオブジェの様に配置され、回りにはお地蔵さんと獅子頭が



あちらこちらに置かれていた。ただ石碑や仏塔等はなくシンプルでスッキリしていた。禅宗だからなのか?と思いつつも、地面に置かれている獅子頭を見て、これは何から守って貰うためなのか?と気になった。自力救済とはいえ、どうにもならない事もあるから共感できるけど、悟りは?アレコレ考えていたら家の中で転倒し、悟りとは程遠い日々を過ごす羽目になった。

凡人には無理なのかしら。(山田詩子)

《三光院と山岡鉄舟》 「金もいらぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、そのような人でなければ天下の偉業は成し遂げられない」と西郷隆盛に言わ

しめた山岡鉄舟。また彼の没時には数人が殉死したという。単に文武両道の幕臣、天皇侍従にとどまらなかった彼はいかに人格を陶冶したのであろうか? 禅にも造詣が深く、修行用施設を造るため入手したという三光院の地。その境内で彼のスケールの大きさに思いをはせざるを得なかった。(中濱敬文)

《仲間との散策は楽しい》 ☆編集後記に代えて☆

小金井公園の南方向には、鬱蒼と原生林の風情を残す浴恩館公園。静かな住宅街の中の「三光院」は室町時代に遡る「竹之御所流精進料理」がもたらされた尼寺。駅前「しあわせ地蔵」に手を合わせ、農工大近くの交差点から野川公園方向に向かう小路を辿る。南方向の住宅街に少し入ると「はけの道」小川のせせらぎと閑静な雰囲気の中にひっそりと「はけの森美術館」。一人静かな散策も良いが、気の合う人たちと新たな発見を期待して歩くのも楽しい。(小林清次郎)